台大日本語文研究第 19 期
2010 年 6 月，頁 51-76
2010-05-20 收稿，2010-07-19 通過刊登

〈虔十公園林〉及現代學校教育
—以運動場為重點—

段裕行*

摘要

〈虔十公園林〉爲宮澤賢治所著，描述有著輕度智能障礙的虔十，生前遭受輕視，死後卻受到高度的評價，且隨著記念碑一同存留於人們的記憶中。故事中，孩子們及那所學校扮演了重要角色，於歷史本文中是如何被看待？本論文以多次提及之運動場爲重點，也藉由虔十公園林反思現代學校教育問題。

關鍵詞：宮澤賢治、虔十公園林、現代學校教育、體育課、智能障礙

* 文藻外語學院日本語文系助理教授

"The Kenju Park Grove" and Modern School Education —focus on sports ground—

Dan, Hiroyuki*

Abstract

"*The Kenju Park Grove*" which is written by Kenji Miyazawa, narrates that Kenju with mild mental retardation was disparaged during his life time. After his death, he received high appraisal and furthermore, a monument was erected to memorialize him. In the story, the children and the school played important roles. On the other hand, what is their position in the historical context? The thesis is focused on sports ground which is mentioned frequently and reflects on the problems of the modern school education via "*The Kenju Park Grove*".

Keywords: Kenji Miyazawa, *The Kenju Park Grove*, Modern Educational System, physical education, mental retardation

* Assistant Professor of the Department of Japanese Language, Wenzao Ursuline College of Languages

「虔十公園林」と近代学校教育
―運動場に着目して―

段裕行*

要旨

宮沢賢治の「虔十公園林」は、知的障害者といってよい虔十が生前は馬鹿にされながらも、死後には評価されて記念碑と共に人々の記憶に留められるといった物語である。そこでは子供とその背後にある学校が大きな役割を果たしているが、それは如何なる歴史的文脈の中にあるのか。本稿では、作品に頻出する「運動場」に着目しながら、「虔十公園林」における近代学校教育の問題を考えた。

キーワード：宮沢賢治、「虔十公園林」、近代学校教育、体育、知的障害者

* 文藻外語学院日本語文系助理教授

「虔十公園林」と近代学校教育
—運動場に着目して—

段裕行

一、「虔十公園林」の中の子供

宮沢賢治の「虔十公園林」は、知的障害者と言ってよい虔十が生前は〈少し足りない〉と馬鹿にされながらも、死後には評価されて記念碑と共に人々の記憶に留められるといった物語であるが、そこでは、子供とその背後にある学校が大きな役割を果たしている。虔十の杉林は、いつしか〈学校帰り〉の子供達の遊び場となり、死後の虔十に対する顕彰は、虔十が〈まるで学校の附属の運動場のやう〉な杉林を造ったことに対して行われる。また、その評価も、以前杉林で遊んだ子供達の中の一人で現在は近代学校教育制度を駆け上がった博士によってまず行われ、博士は杉林を〈虔十公園林〉と名付けることを小学校の校長に提案し、その呼びかけに小学校の卒業生達も応えるのである。こうしてみると、虔十に対する評価が好転することの背後に小学校を卒業した子供達の成長が色濃く存在していることが分かるだろう。

最初に、虔十と子供達との関係という観点から先行研究を幾つか見ておくならば、例えば、続橋達雄は作品の作為性や教訓性を指摘する一方で、子供達の無邪気さが作品に〈じつにさわやかで美しい〉印象を与えていると述べている[1]。続橋は子供達が虔十を馬鹿にするという点には特に触れておらず、虔十と子供達との関係を肯定的に捉えての感想だと思われる。それに対し、小沢俊郎は虔十を馬鹿にする子供達に着目して、〈子供らはその悪い社会の働らきの象徴になっている〉と言い、〈杉のこっちにかくれながら〉子供達を見るといった虔十と子供達との距離を置いた関係については、虔十の子供達

[1] 続橋達雄（1992）「タネリのさびしさ」続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成 第一九巻』日本図書センター PP.250-251。

に対する〈片恋に似た愛情〉であると指摘している[2]。続橋と小沢の論は「虔十公園林」における子供の問題をそれぞれの立場から指摘するものであり、特に小沢の論は、虔十と子供達とがコミュニケーション上の問題を抱えていることと、そのことが「虔十公園林」の中で持つ重要性を教えてくれる。ただ、その一方で、続橋と小沢の論ではそれぞれの論者の漠然とした子供観が前提とされてしまっていることも事実である。これは両者の論の主題がそれぞれ別にある以上、やむを得ないことではあるのだが、「虔十公園林」における子供の問題をさらに掘り下げて考えようとするならば、その前提として「虔十公園林」の子供達が置かれた歴史的背景を考慮すべきではないだろうか。

そして、その点で言えば、「虔十公園林」の子供達の背景にある近代学校教育の問題を指摘する木村功の論は、「虔十公園林」の子供達の歴史性に改めて気付かせてくれるものである。木村は、杉林で行進をして遊ぶ子供達に近代学校教育の価値観を確認した上で、〈虔十が創出した《杉林》は、虔十の自然と触れあう喜びの世界を、《杉林》で遊ぶ子ども達の世界へとコミュニケートしたのではない。子ども達は、前述したように《並木道》で行進遊戯をするという、近代的な観念の中で遊んでいた〉と述べるのである[3]。しかし、その木村の論にしても、近代学校教育の問題が指摘されるのは子供達が近代的価値観を身に付けていることを確認するためにであり、「虔十公園林」における近代学校教育の問題自体の考察が必ずしも十分に展開されているとは言えない。また、木村は近代性をめぐる議論を〈人間的なもの〉や〈仮構〉といったものに敷衍し、〈人間〉対〈自然〉という図式で「虔十公園林」を読もうとする。本稿でも最後に触れるように、「虔十公園林」という物語において自然なるものが効果的に用いられている部分があることは否定しないものの、虔十を自然

---

2 小沢俊郎（1992）「虔十とベコ石」続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成 第二〇巻』日本図書センター PP.57-60。

3 木村功（2000）「宮沢賢治「虔十公園林」論―仮構としての〈虔十公園林〉―」『岡山大学国語研究』第一四号 P.9。

の側に置いて人間社会との対立を強調する読みの中では、近代化される人間社会の中で生きる虔十の姿が十分に捉えきれないのではないだろうか。

そこで本稿では、「虔十公園林」における子供と学校の問題を近代化の問題を中心に据えた上で読み直してみたい。「虔十公園林」が描き出している世界はある種のユートピア的なものであると言えるだろうが、その世界は如何なるものに支えられているのか。あるいは逆に亀裂が入れられているのか。本論では、そのことを近代学校教育制度という観点から、より具体的には運動場という場に着目して考察したいと思う。

二、近代化の物語

「虔十公園林」の原稿は大正一二年頃に書かれたものと推定されているが[4]、作品の舞台となっているのは、それよりも少し前の時代である。まず、「虔十公園林」の作中時間の設定を確認しておきたい。「虔十公園林」は、〈虔十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいてゐるのでした〉というようにして始まり、最初に虔十の紹介が行われる。次に虔十が杉林を植えることになる経緯が、〈ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、虔十はいきなり田打ちをしてゐた家の人達の前に走って来て云ひました〉という言い方で語られていることから、冒頭で語り手によって紹介される虔十の姿は、杉林を植える前年もしくは数年前であると考えるのが自然だろう。また、虔十の記念碑が建立された後、物語の結末では、〈全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂、夏のすゞしい陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本統のさいはひが何だかを教へるか数へられませんでした〉と書かれており、公園林がもたらす効果が過去形ではなく、

[4] 『新校本宮澤賢治全集』では、「虔十公園林」に使用されている原稿用紙を大正一二年後半に一括購入されたものと推定している。また、続橋達雄は、大正一二年頃に清書されたと推定している（続橋達雄（1980）「虔十公園林」佐藤泰正編『別冊国文学 六 宮沢賢治必携』学燈社 P.110）。

〈これから〉、〈教へるか数へられませんでした〉というように未来にも開かれた形で語られているのを見ると、語り手がいる時間は石碑建立と同時期か、建立からまだそれほど時間が経っていない時期ではないかと思われる。

そして、こうした「虔十公園林」の作中時間は、大きく前半部と後半部分とに分けることが出来、前半は虔十が杉を植えてから死ぬまでの期間を中心とし、後半は虔十が植えた杉林が虔十の死の二十年後に〈虔十公園林〉と命名される時点を中心としているが、この前半と後半の間には次のような村の変質を述べる言葉が挟み込まれている。

> 次の年その村に鉄道が通り虔十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰れて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。

既に木村功が指摘しているように、語り手が述べる産業構造の変化を伴った村から町への移行は近代化と呼ばれるものであるのだが、具体的にはいつ頃の年代が想定されているのだろうか。ここで、現実の岩手県の歴史を参照して鉄道を東北本線とするならば、それは、明治二三年に盛岡まで開通、さらに翌明治二四年には青森まで延長されている[5]。鉄道が諸産業に与えた影響は大きく、例えば「虔十公園林」にもある製糸場について見てみると、明治二〇年、二一年には九工場だったものが明治二七年には三十六工場というように急増している[6]。

また、鉄道は物流の増大をもたらすと同時に、人の移動ももたらした。「虔十公園林」では、虔十が死んでから二十年後、つまり鉄道開通から十九年後の村の住民のことが、〈町の人たちも大ていは新ら

---

[5] なお、「虔十公園林」では、〈いつかすっかり町になってしまったのです〉と書かれている。これを仮に稗貫郡花巻町成立に対する言及と捉えるならば、それは明治二二年であり、東北本線の盛岡開通の前年となる。この点、鉄道開通後に町に変化したとする「虔十公園林」の記述とは異なることも記しておきたい。

[6] 岩手県（1964）『岩手県史 第九巻 近代篇四』杜陵印刷 P.1247。

しく外から来た人たちでした〉と書かれており、この点も木村功が、〈外部に対して閉じられていた村落共同体は、鉄道という交通網を介して《新しく外から来た人たち》を組み込んだ開かれた社会となり、産業構造の変化をはじめ村落共同体の解体や人間関係上の大きな変化が生じる事態となっている〉と簡潔にまとめる通りである[7]。「虔十公園林」は、公園林の成立の過程を風景の変化や人の移動の中に位置付け、そうすることによって新たな共同体の成立を提示していると言ってよく、そのことは、「虔十公園林」において扱われる記憶が、単なる虔十一個人にまつわる記憶というだけではなく、共同体の記憶としての側面も持つということである。

ところで、安藤恭子が言うように「虔十公園林」では、語りの文が標準語、虔十の生前の会話が方言、虔十の死後の会話が標準語というようになっているのであるが[8]、このことは先に確認したような村の近代化と関係していると思われ、村から町への風景の急激な変容という形で物語の前半と後半とをはっきりと分断した近代化の過程は、その風景の中に置かれた人々の言葉をも分断していると言ってよい。では、虔十の生前の場面での人々の会話が方言で行われ、虔十の死後の場面での人々の会話が標準語で行われることにはどのような意味があるのか。そして、そうした設定を採用することによって「虔十公園林」という物語は如何なる共同体を提起し、その時に記憶される虔十の記憶や過去の共同体の記憶とは如何なるものなのか。次に、近代化の中に置かれた人々の身体に着目しながら「虔十公園林」における近代化の問題を考えてみたい。

杉林に〈虔十公園林〉と名前を付けることを提案する博士の帰郷は十五年ぶりのものであるとされている。博士が何歳で村を出たかは書かれていないので、おおよその計算ではあるが、仮に先の東北本線開通年と併せて考えてみると、博士が中学校卒業の時点で村を

---

7 木村功（2000）前掲論文 P.7。

8 安藤恭子（2002）「イーハトーブ〈語り〉学 語る身体、語る言葉―「虔十公園林」を聞く／読む」『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第二四号 P.17。

離れたとすれば、明治一七年頃に小学校に入学していることになる。つまり、彼は明治五年に学制が公布されたことに始まる近代教育の創始期に教育を受けているのであり、学校では標準語教育も当然受けていると思われ、実際、校長との会話が標準語によって行われているだけでなく、〈半分ひとりごとのやう〉な言葉も標準語である。

> すると若い博士は愕ろいて何べんも眼鏡を直してゐましたがたうたう半分ひとりごとのやうに云ひました。
> 「あゝ、こゝはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却って小さくなったやうだ。みんなも遊んでゐる。あゝ、あの中に私や私の昔の友達が居ないだらうか。」

独り言のような言葉でさえもが標準語で発せられていることは、博士の標準語が既に深く身体化されたものであることを示しているだろう。こうした標準語の使用が当たり前ではないこと、つまり「虔十公園林」という作品が標準語を前提としたものでないことは、前半部での虔十とその家族との会話が、例えば、〈「お母、おらさ杉苗七百本　買って呉ろ。」〉、〈「杉苗七百ど、どごさ植ぇらぃ。」〉などといったように方言を用いて行われていることからも明らかである。

安藤恭子は、「十月の末」の中に近代学校教育をめぐる世代間ギャップの問題が描かれていると指摘しているが[9]、それは同時に標準語をめぐる世代間ギャップの問題でもある[10]。そして、こうした世代間ギャップの問題は「虔十公園林」にも当てはまるのではないか[11]。虔十に関しては後でも述べるが、とりあえず、近代学校教育を受けていない虔十の両親と近代学校教育を受けた博士に関して言えば、その間には彼等が用いる言葉という点で大きな懸隔が存在している。また、米村みゆきは、「グスコーブドリの伝記」での方言が教育格差

---

9 安藤恭子（1996）「「十月の末」―浸食される構造」『宮沢賢治〈力〉の構造』朝文社 PP.89-96。

10 拙稿（2000）「「イーハトヴ」の近代―「東北」の記憶と忘却―」『日本文学』四九巻二号 PP.28-29。

11 安藤恭子は「虔十公園林」の標準語についても、〈なぜ地の文が標準語であるのかという問題もふくめ、標準語をめぐるテクスト外の歴史的な問題がここには関わってくるだろう〉と述べているが、具体的な分析は行っていない（安藤恭子（2002）前掲論文 P.17）。

に基づく社会階層差と関わっていると言うが[12]、「虔十公園林」での方言を話す虔十一家と標準語を話す博士と校長という図式に、米村が「グスコーブドリの伝記」に確認したのと類似した問題を読み取ることが出来るだろう。

さらに、米村は、ブドリと幼い頃生き別れになった妹ネリが再会する場面でのネリの言葉が直接話法では記されていないことの不自然さに、「グスコーブドリの伝記」における方言の抑圧の一端を読み取っている[13]。そして、この点にも「虔十公園林」に同様の問題が認められるのである。前半部では虔十一家の方言による会話が直接に描かれているのに対して、後半部では記念碑建立を喜ぶ姿が〈虔十のうちの人たちはほんたうによろこんで泣きました〉としてただ一言書かれるのみである。本来ならば感動的なものになってもよいはずのこの場面で、虔十一家の言葉、すなわち方言が直接話法で書かれていないという事態は、「グスコーブドリの伝記」のネリの言葉が直接話法で書かれていないのと同様に少し不自然であると言えないだろうか。

「虔十公園林」の前半部と後半部とで方言と標準語とが対比的に用いられ後半部からは必要以上に方言が排除されているのは、作品中の年代設定が必然的にもたらしたというようなものではないだろう。「虔十公園林」を読む時、公園林と記念碑によって何が記憶に留められたかといったことにのみ注意がいきがちであるが、同時に、何が忘却されたのかといったことにも注意を払う必要がある。では、不自然とも言える記憶の操作を行うことによって、「虔十公園林」は如何なる共同体の記憶を提示し、また如何なる理想の共同体を提示しようとしているのだろうか。本節においては、主に言葉の問題に着目したが、次節では、それを近代学校教育における身体の規律訓練化の問題と繋げることによって、「虔十公園林」が提示しようとしている共同体像についてさらに考えてみたいと思う。

---

[12] 米村みゆき（2003）『宮沢賢治を創った男たち』青弓社 PP.36-40。
[13] 米村みゆき（2003）前掲書 PP.41-42。

三、運動場という場

「虔十公園林」では、虔十の杉林が運動場と関連付けて語られている。

> 学校がすぐ近くに建ってゐましたから子供らはその林と林の南の芝原とをいよいよ自分らの運動場の続きと思ってしまひました。

虔十の杉林は、その公園としての側面に着目されることが多いが、一方で、杉林が運動場と繰り返し関連付けられていることも確認しておく必要があるだろう。子供達は杉林を〈自分らの運動場の続き〉と認識している。また、そもそも、後に杉林となる野原は作品冒頭において既に、〈虔十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらゐの野原がまだ畑にならないで残ってゐました〉として語り手によって表現されているのであって、杉林が後に運動場と深い繋がりを持つことは、この時点で既に予告されていたとも言えるのである[14]。

ここで、博士の幼少期に対応する時代の現実の小学校、すなわち明治二〇年代頃の運動場の設置状況を見てみるならば、当時、小学校の運動場は必ずしも十分に整備されているとは言えない状況ではあったものの、少なくとも運動場が設置された小学校は既に存在しており、例えば花巻小学校の場合、八八坪（生徒数一六一人、一人当たり〇・五四坪）という明治一六年の記録が残っている[15]。では、当時の運動場では具体的にどのようなことが行われていたのか。まず、「虔十公園林」は杉林で遊ぶ子供達の姿を次のようにして描いている。

> あっちでもこっちでも号令をかける声ラッパのまね、足ふみ

[14] 安藤恭子は「虔十公園林」の語り手が未来の情報を盛り込んでいることを指摘しているが（安藤恭子（2002）前掲論文 PP.16-17）、その一つに運動場についての情報があると言えるだろう。安藤が言うように、「虔十公園林」の語り手は決して透明な存在とは言えず、強い実体性を持って物語を制御しているところがある。その語り手が、杉林が未来に運動場のようになることをほのめかしているという事実は、「虔十公園林」において運動場が持つ意味の大きさを示してはいないだろうか。

[15] 大久保英哲（1998）『明治期比較地方体育史研究―明治期における石川・岩手県の体操科導入過程―』不昧堂出版 P.432。

の音それからまるでそこら中の鳥も飛びあがるやうなどっと起るわらひ声、虔十はびっくりしてそっちへ行って見ました。

　すると愕ろいたことは学校帰りの子供らが五十人も集って一列になって歩調をそろへてその杉の木の間を行進してゐるのでした。

ここでの子供達の行進について木村功は、明治二〇年代頃から学校教育に導入され始めた遊戯の一種としての行進の影響だとする[16]。しかし、「虔十公園林」の子供達の行進の背景に学校教育が存在していることは確かだとしても、その〈声ラッパのまね〉という記述から、学校での兵式体操、もしくは、兵式体操の影響も受けた、いわゆる兵隊ごっことの結び付きがより強いのではないか[17]。明治一九年の小学校令の発布に伴い小学校の必修科目となった体操科では健康を育むと共に規律を養うことも求められたが、強兵の育成をも目的とした兵式体操が森有礼によって学校教育に導入されるようになると、その傾向は一層強くなり、岩手県でも兵式体操を高等小学校の授業に導入することが布達されている[18]。なお、「兵式体操」という言い方は明治二一年に改称されてからのもので、それまでは「隊列運動」と呼ばれていたが[19]、例えば、隊列運動の指導書の一つである『普通体操　隊列運動法』(松石安治編述、金港堂、明治一九年)は、〈教練の要旨〉として、〈隊列運動ノ目的ハ生徒二規律ノ習慣ヲ与ヘ体力ヲ強健ニシ品格気質ヲ高尚ニスルニ在リ〉[20]などと述べた

[16] 木村功（2000）前掲論文 PP.6-7。
[17] 行進遊戯が基本的に円形行進や十字形行進などの隊形変化を伴うものであるのに対して、「虔十公園林」の行進は隊形変化を伴わないものであり、遊戯性は低いと言えよう。もっとも、特に行進遊戯の導入期においては、隊形変化を伴う円形行進や十字形行進を行う前に号令を伴う軍隊調の行進法を学ぶといったこともされており、この点で言えば、「虔十公園林」における子供達の行進を行進遊戯の影響とすることも出来るのだが、それは、〈当初においては、行進法は、それまで行われていた普通体操法を応用したものとしてとらえられていた〉ということであって（名須川知子（2004）『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房 PP.51-52)、行進遊戯自体の影響ということとは異なると思われる。
[18] 大久保英哲（1998）『明治期比較地方体育史研究―明治期における石川・岩手県の体操科導入過程―』不昧堂出版 P.297。
[19] 今村嘉雄（1970）『日本体育史』不昧堂出版 P.399。
[20] 海後宗臣編（1967）『日本教科書大系 近代編 第二七巻 習字その他』講談社

上で、号令や行進の方法を説明している。兵式体操の一環としては〈学童が日章旗を先頭に、ラッパや大鼓で調子をとって、二列縦隊の行進をする〉などといったことも行われており[21]、「虔十公園林」での〈声ラッパのまね〉とはそうした行進の際のラッパを口真似したものだろうか。また、兵式体操は運動会の行事としても行われていた。大久保英哲は、明治一九年から明治二三年までに岩手県で行われた運動会の傾向を分析し、〈最も特徴的なことは各運動会がおよそ軍隊の編成や行軍法を擬して行われたことであった〉と指摘している[22]。大久保が整理紹介するものを見ても、当時の行事内容には〈隊列運動〉や〈軍歌行進〉などといったものが数多く見て取れるのである[23]。おそらく、こうした軍隊調の行進は子供達の遊びにも影響を与えていた、または影響を与えるべきだと考えられていたと思われ、「虔十公園林」の作中年代当時の国語教科書には次のような記述を見付けることが出来る。

> こゝに、六人の子どもがゐます。太郎は、刀を持ちて、大しやうとなり、三郎四郎五郎は、ぼうをかついで、兵たいとなりました。此兵たいは、よくそろうてならんでゐます。
>
> らつぱを吹くのは、力三で、たいこをうつのは、二郎であります。
>
> 此兵たいは、みなつよくて、よく大しやうのがうれいどほりにすゝみます。(『尋常小学読本　巻之一』、第五課、文部省、明治二〇年)[24]

木下秀明はこの文章の背景に兵式体操が存在すると言い、〈善人すなわち国民の形成上、兵式体操が欠かせないことを説き、号令のもとでの秩序、紀律の遵守を勧奨した後、児童に他日兵となる覚悟を求めている〉と述べている[25]。「虔十公園林」との関連からすれば、

P.674。
[21] 岸野雄三・竹之下休蔵(1983)『近代日本学校体育史』日本図書センター P.29。
[22] 大久保英哲 (1998) 前掲書 P.304。
[23] 大久保英哲 (1998) 前掲書 PP.297-304。
[24] 海後宗臣編(1964)『日本教科書大系 近代編 第五巻 国語(二)』講談社 P.25。
[25] 木下秀明 (1982)『兵式体操からみた軍と教育』杏林書院 P.98。

その中にある、〈そろうてならんでゐます〉、〈らつぱ〉、〈がうれいどほりにすすみます〉などの言葉に注目したい。これを「虔十公園林」での、〈号令をかける声ラッパのまね、足ふみの音〉、〈一列になって歩調をそろへてその杉の木の間を行進してゐる〉といった言葉と並べてみるならば、「虔十公園林」の子供達の遊びにも兵式体操の影響がないとは言えないだろう。ラッパを吹きながらの行進という観点から関連する文章を教科書中にさらに探すならば、木下が引いているもの以外にも次のような記述を見付けることが出来る。

ミンナデテウレンセウ。
ボクハテヌグヒヲボウニツケテハタニスル。
ボクハハタモチ、イトウクンハタイシヤウデス。
サアミンナソロヒタマヘ。
サトウクン、ラツパヲフキタマヘ。
ススメ、ヒダリ、ミギ、ヒダリ、ミギ。(新保磐次『日本読本初歩　第二』、金港堂、明治二〇年)[26]

第十八課　テウレン
オヤ、カハユラシイ・ヘイタイガ来マシタ、大シヤウモ、らつぱフキモ、ハタモチモヰマス。大シヤウハ、ハリコノエボシヲ・カブツテ、オモチヤノ「さあべるヲ・ヌイテヰマス。旗ハ、紙ニテ、日ノ丸ガツイテヰマス。テツパウハ、木ヤ竹デス。」
オヤオヤ犬ニ大ハウヲ・ヒカセテ来マシタ。ウタツテ来ル軍歌ハ、イサマシイ歌デス。(学海指針社編『帝国読本　巻之三』、集英堂、明治二六年)[27]

どちらも、調練ごっこの様子を描いたものであるが、ラッパを吹きながら号令と共に行進する子供達の姿は、当時の学校教育が求めた理想的子供像の一つであったと言えるかもしれない。むろん、〈声ラッパ〉などの言葉が書かれているからといって、教科書にあるよ

[26] 海後宗臣編（1964）前掲書 P.331。
[27] 海後宗臣編（1964）前掲書 P.472。

うな調練ごっこが「虔十公園林」で展開されていたとは断定出来ない。ただ、それが直接的に兵式体操であるかはともかくとして、少なくとも、兵式体操を頂点とするような規律訓練としての体育の影響を受けていると、ひとまずは考えることが出来るのではないだろうか。

また、兵式体操に代表されるような体育による身体訓練は標準語教育とも無縁ではなかった。長志珠絵は、明治二二年に七歳で沖縄の尋常小学校に入学した比嘉春潮の回想録を引きながら、体育による身体訓練と重なった標準語教育の問題を指摘している[28]。この身体的な訓練と共にある標準語習得といった視点は、「虔十公園林」の子供達の身体に対して体育が如何なる影響を与えていたかを考える際にも示唆的である。東北地方も沖縄と同じように方言が大きな問題となった地域であった。

実際、「風の又三郎」の運動場では、教師の標準語による号令が子供達の方言と対照的なものとして描き出されている。「風の又三郎」の教師は運動場で、〈前へならへ〉、〈直れ〉、〈前へおい〉と号令を掛けるが、これは、「饑餓陣営」で特務曹長が掛ける号令、〈集まれっ。気を付けっ。右ぃおい。直れっ。番号〉や、「さるのこしかけ」で猿の大将が掛ける号令、〈「気を付けっ」「右いおい。」「なおれっ。」「番号。」〉と類似したものであり、宮沢賢治の作品の中でも運動場と軍隊とは号令や整列によって繋がっている。

押野武志は、「風の又三郎」に描かれた運動場での整列について、それが軍隊の身体馴致のシステムと同型のものであると言う。押野はさらに、〈抽象的で均質な国民を生産するためには、身体の訓育と同時に、「国語」の普及が必須の条件となる〉とも述べて、「風の又三郎」が方言と標準語の問題を扱っていることを確認するのだが[29]、身体の規律訓練化と標準語の身体化とが同時に行われるような場として「風の又三郎」の運動場は存在していると言えないだろうか。

---

[28] 長志珠絵（1998）『近代日本と国語ナショナリズム』吉川弘文館 P.70。
[29] 押野武志（2000）『宮沢賢治の美学』翰林書房 PP.211-214。

筆者はかつて、宮沢賢治が軍隊と標準語教育との関係を描き出していることを指摘したことがある[30]。身体の規律訓練化と標準語教育が交差する場である小学校の運動場も、宮沢賢治の作品においては大きな意味を持っていると言えるだろう。そして、直接的に運動場での規律訓練の様子が描かれているわけではないものの、「虔十公園林」に描かれた行進する子供達の姿は、同様の問題が「虔十公園林」にもまた存在していることを伺わせるものなのである。

四、虔十と近代学校教育

「虔十公園林」において運動場が持つ意味の大きさを確認した。ならば、物語の主人公である虔十は、運動場、そして運動場の前提としての学校教育と如何なる関係にあるのか。最初に述べたように、虔十と学校の子供達との関係については既に先行研究が言及するところであるが、虔十自身と学校教育との関係については、従来あまり論じられてこなかったように思われる。

まず、虔十の年齢であるが、具体的には記されていないものの、例えば物語冒頭で、〈けれどもあんまり子供らが虔十をばかにして笑ふものですから虔十はだんだん笑はないふりをするやうになりました〉というように子供達と対比的に描かれていることからして、この時点では既に青年といってよい年齢であったのではないか。仮に二十五歳であれば、虔十は安政三（一八五六）年生まれで明治六年の学制実施時には十七歳ということになり、虔十の就学可能性はほぼない。一方で、仮に十八歳と考えるならば、虔十は文久三（一八六三）年生まれで学制実施時には十歳ということになり、小学校に入学した可能性は残る。

ただ、たとえ年齢的には可能性があったとしても、学校教育の黎明期で未就学者が珍しくなかった時代であったことを考えると、虔十の就学可能性は高くなかったと思われる。学制では全国民を等し

[30] 拙稿（2001）「宮沢賢治と鉄道—植民地化された身体—」『昭和文学研究』第四三集 PP.17-18。

く対象とするとされたものの、そうした考え方と一般民衆の考えとの間には大きな隔たりがあり、一般民衆に教育の意味が十分に理解されているとは言えなかった[31]。具体的な就学率を見ても、明治六年の就学率は、男子三九・九％、女子一五・一％、男女平均二八・一％となっており[32]、その数字は低い。また、教育に対する民衆の無理解は農村や僻地ほど根強く、特に東北地方は全国最低レベルであったという[33]。

さらに、虔十が知的障害者であることも、その就学可能性を低くしている。明治一三年には教育令が改正され、その際、〈心身に障害のある癲癇・白痴・盲・唖・聾・蹇は、就学を免除させるべき「廃疾」とみなされるようにな〉る[34]。明治四四年には、「特殊児童」に関する全国調査が行われているが、岩手県の調査結果を見ると、確かに、「白痴」として分類される児童が何人か就学しているものの、第一学年での就学人数が、男子二三人、女子九人なのに対して、第二学年では、男子一二人、女子一人、第三学年では、男子六人、女子二人と次第に減少している。これはおそらく、就学したとしても進級せずに途中で退学するものが多かったためだろう。まして、虔十の世代が就学時期を迎えたと仮定される時代、まだ全体的に就学率が低かったことを考えるならば、知的障害児の就学があったとしても、その就学率は極めて低かったと想像され、虔十が知的障害児であることによって不就学となったということは十分に考えられるのである。

小学校全体の就学率は年々上昇し、明治三八年には約九割の児童が就学するようになる[35]。しかし、その一方で、この頃までには知的障害児であることを理由とした就学免除も浸透し、明治三三年の小学令改正では、〈障害の重い学齢児童癲癇白痴又は不具廃疾の者は、

[31] 岩手県教育委員会編（1981）『岩手近代教育史 第一巻 明治編』岩手県教育委員会 P.394。
[32] 文部省（1972）『学制百年史 記述編』ぎょうせい PP.194-196。
[33] 岩手県教育委員会編（1981）前掲書 P.395。
[34] 岩手県教育委員会編（1981）前掲書 PP.1396-1397。
[35] 文部省（1972）前掲書 P.296。

義務教育の対象外とされ、学齢児童病弱又は発育不完全の者は、就学猶予が当然であると考えられるようになった〉[36]。物語の時代設定によって目立たないものの、ここまで見てきたような「虔十公園林」において学校が持つ意味の大きさを考えるならば、知的障害児虔十の就学問題には注意を払うべきではないか。それは、「虔十公園林」が提示するユートピアの中で虔十自身が如何に位置付けられているのかといった問題と無関係でないはずである。小学校の運動場のような杉林を造ったことによって顕彰される虔十であるが、「虔十公園林」が提示する虔十と近代学校教育との幸福な関係のためには、知的障害児の就学問題という現実には存在したであろう齟齬を回避することが必要だったのかもしれない。そして、「虔十公園林」が回避しようとするのは、知的障害児虔十が就学することによる学校との直接的な関係だけではない。学校を中心とした社会に受け入れられた虔十が実際に学校の子供達と直接的な交流を取り結ぶ様子もまた、虔十がチフスで唐突に死ぬという設定によって避けられているともいえるのである。

明治四〇年に小学校令改正によって六年制義務教育が完成すると、知的障害児の就学問題が大きくなってくる[37]。また、就学問題以外でも知的障害者による非行や犯罪の予防が社会問題化して、明治三三年には、「精神病者監護法」、「感化法」、「行政執行法」などが制定され、社会防衛対策がとられることとなり[38]、知的障害者を取り巻く状況は次第に厳しいものとなってゆく。

> その虔十といふ人は少し足りないと私らは思ってゐたのです。いつでもはあはあ笑ってゐる人でした。毎日丁度この辺に立って私らの遊ぶのを見てゐたのです。この杉もみんなその人が植えたのださうです。あゝ全くたれがかしこくたれが賢くないか

[36] 岩手県教育委員会編（1981）前掲書 P.1397。
[37] 国立教育研究所編（1974）『日本近代教育百年史 六 学校教育（四）』国立教育研究所 P.654。
[38] 茂木俊彦・高橋智・平田勝政（1992）『わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究』多賀出版 P.19。

はわかりません。

博士はこうした自省めいた言葉を口にするものの、仮に虔十が死ななかったとしたら、虔十は「虔十公園林」のユートピア的世界の中で居場所を持ち得ただろうか。生者である虔十の姿を描くならば、虔十が話す方言を描写せずにはすまないだろうし、公園林で遊ぶ子供達との直接の交流も描かねばならないかもしれない。果たして、「虔十公園林」のユートピア的世界はそれに耐えきれただろうか。

牛崎敏哉は、佐藤勝治が回想する花巻の風景が「虔十公園林」の中の風景と類似していることを指摘しているが[39]、佐藤勝治が回想する「虔十公園林」の執筆年当時の花巻の風景とは、次のようなものである[40]。

> いまその鉄道をまたいで行けば右は花巻幼稚園、左は花巻小学校である。その小学校の校舎西端あたり（こちらがわ）に避病院があったのである。町は時々えきり、せきり、腸チフスが流行し、その度ごとに病室の少ない病舎は満員となり、多くは自宅療法を強いられた。
>
> （中略）
>
> さて大正十一、二年の頃であろうか、避病院は新設された花巻共立病院に移り、あとの病室何室かを精神病者の拘禁場所として使用された。私たち子供（小学四、五年生）は、こわいもの見たさでその精神病舎をのぞきに城跡の荒れ地に行ったものである。大部分は荒れ地であるが、鉄道を越えた入口近くに誰かが麦畠や稗畠を作っていた。町にことわりなしに土地を利用していたのであろうから、ごくわずかの畠であった。友だち四、五人とこわい精神病者（叫び声を立てていた）を見に行った私は、家に帰ってから俳句を一つ作り、翌日は綴り方の時間に、短い文章にまぜて出した。（傍点原文）

---

[39] 牛崎敏哉（2001）「杉苗を植えるということ―「虔十公園林」をめぐって」『宮沢賢治』第十六号、洋々社 PP.97-98。

[40] 佐藤勝治（1987）「宮沢賢治と四っ角山」『賢治文学のよろこび 第一集』、寂光林 PP.1-2。

佐藤が言及するチフスの流行がチフスによる虔十の死を連想させると牛崎は言うが、「虔十公園林」との関連を考える際にさらに興味深いのは、チフス流行の際に患者が収容されていた避病院が後に〈精神病者の拘禁場所〉として利用されたと佐藤が証言していることである。〈拘禁場所〉に拘禁された精神病者達と虔十とを同一視することは出来ないが、佐藤の回想の中の精神病者と子供達との関係は、チフスで病死することなく知的障害者に対する社会防衛対策が強化された時代まで生き続けた虔十が置かれる位置を、どこか不気味な形で暗示しているとは言えないだろうか。

さて虔十はその秋チブスにかかって死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやっぱりその病気で死んでゐました。

ところがそんなことには一向構はず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。

お話はずんずん急ぎます。

虔十の唐突な死とそのそっけない描写の不自然さについては、既に続橋達雄が作為性を指摘し[41]、安藤恭子も「虔十公園林」の虔十の死を述べる際の時間の流れが語り手によって制御されているという言い方をしている[42]。その自己犠牲的な死ゆえに注目されてきた「グスコーブドリの伝記」でのブドリの死や「銀河鉄道の夜」でのカムパネルラの死とは対照的に、「虔十公園林」における虔十の死が持つ意味は、それが病死であることもあってか、これまで必ずしも十分に論じられてきたとは言えない。しかし、たとえ病死であっても、その唐突な死には無視出来ない問題が存在しているように思われる[43]。酒井直樹は、宮沢賢治の作品においては死がユートピアと

41 続橋達雄（1992）前掲論文 PP.250-251。
42 安藤恭子（2002）前掲論文 PP.16-17。
43 虔十と共にチフスによって死ぬ平二についても簡単に述べておくならば、〈平二は百姓も少しはしてゐましたが実はもっと別の、人にいやがられるやうなことも仕事にしてゐました〉と、いささか唐突にも思えるような形で書かれていることは注目してよい。信時哲郎は、詩「〔あな雪か　屠者のひとりは〕」の中の〈屠者〉という言葉について考察を加える際に、東北地方における被差別部落問題の存在との関連を示唆しているが（信時哲郎（2005）「宮沢賢治「文語詩稿五十篇」評釈　六」『山手日文論攷』第二五号 PP.89-90）、

して成立してしまっているのではないかといった問題提起を行っているが[44]、「虔十公園林」のユートピア的世界は作為的な虔十の死によって支えられているとも言えるのである。

五、歴史の語り直しとしての「虔十公園林」

本稿では、近代学校教育との関わりという観点から、特に運動場に着目して「虔十公園林」を読み直してきた。杉林が運動場に喩えられていることは、虔十を馬鹿にする子供達、そして、その子供達の背後にある近代学校教育と虔十との和解の演出の一つとして、現実には様々な形で存在した齟齬を見えなくする効果があるだろう。ただ、ここまで杉林が運動場に喩えられるという点を強調してきたものの、実は「虔十公園林」では、杉林が運動場に喩えられている一方で、杉林はあくまでも虔十の家の所有地であり学校の運動場ではないことにも言及されているのである。最後に、そのことが持つ意味について述べておきたい。

> 「こゝは今は学校の運動場ですか。」
>
> 「いゝえ。こゝはこの向ふの家の地面なのですが家の人たちが一向かまはないで子供らの集まるまゝにして置くものですから、まるで学校の附属の運動場のやうになってしまひましたが実はさうではありません。」

学校との密接な繋がりを言いながらも学校との完全なる融合は否定する校長の言葉は、意図せずにして虔十の杉林と近代学校教育との複雑な関係に触れてしまっている。「虔十公園林」は、語り手の語りの時点からすれば、およそ三十年前からの出来事を、宮沢賢治による作品執筆の時点からすればおよそ四十年前からの出来事を回想するようにして行われる語りである。但し、そこで語られる歴史は

平二の〈人にいやがられるやうなこと〉を、スティグマを負わされたという点では障害者と同様の被差別部落民の問題と繋げて読むことは出来ないだろうか。「虔十公園林」が近代化の問題に拘っていることを考え合わせると、杉林の成立を妨害する平二の職業への言及とその死は、さらに検討すべき問題であるように思われる。

[44] 酒井直樹、西谷修（1999）『〈世界史〉の解体』以文社 PP.90-96。

現実の歴史を単純になぞったものではない。

博士は、〈こゝはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ〉と言い、杉林だけが変化を免れていることに驚くが、「虔十公園林」は、現実の近代化の歴史とは微妙にずれた時間の流れと歴史を差し出そうとしている。「虔十公園林」は号令と共に杉林を行進する子供達の姿を描いてはいるものの、その〈どっと起るわらひ声〉を伴った行進は、兵式体操が求めた規律的なものでは必ずしもない。また、そこでは子供達が学校で聞いたであろう標準語の号令が直接描かれることはないし、かといって方言が描かれているわけでもない。描かれるのは、ただ〈もずのやうに叫〉ぶ子供達の姿のみであり、ここにあるのは、完全に近代化された場としての〈運動場〉でもないし、〈仙人たちが碁でもうつ処〉という、子供達が遊び始める前日の杉林を形容して言われているような前近代的な場でもないのである。

> 下草はみぢかくて奇麗でまるで仙人たちが碁でもうつ処のやうに見えました。

博士は〈あゝ、こゝはすっかりもとの通りだ〉と杉林の不変性を言う。しかし、それは〈仙人たちが碁でもうつ処〉という桃源郷の無時間性そのものではないだろう。子供達が遊ぶのは、運動場のようではあるが実はそうではないという両義的な場としての杉林であり、このことは、前近代的な桃源郷のイメージでもって語られる虔十の杉林が近代的な場である運動場に浸食されているとも言えるのだが、逆に、虔十の杉林が運動場を浸食しているとも言うことが出来る。〈虔十公園林〉が、あくまでも公園林あって、運動場でも杉林でもないのは、近代化を完全に受け入れるのでもなく、だからといって前近代への回帰を志向するのでもない、近代に対するアンビヴァレンスを抱え込んだ第三の場の提示という意味合いも込められているのかもしれない。そして、この杉林の曖昧な性格付けこそが正に、「虔十公園林」というテクストの性格を端的に示していると言える。「虔十公園林」を読む際には、この公園林の持つ二面性、あるい

は多面性を、同時に確認していくような視点が求められるのではないか。

確かに、方言や知的障害者など、近代学校教育から排除されてきたものの幾つかが、「虔十公園林」においても犠牲となってしまっていることは否定出来ない。ただ、その一方で、そうした抑圧や排除の力を押し返し相対化するような部分がこのテクストにあるのもまた事実であると思われる。それは必ずしも力強いものではないかもしれず、ただ単に可能性としてのみ存在しているのかもしれないが、「虔十公園林」には、知的障害者を包摂するような新たな共同体をめぐる宮沢賢治の想像力の一端を、限界と共にではあるが垣間見ることが出来るのである。

付記

宮沢賢治のテクストの引用は『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）に拠った。引用文献については一部表記を改めたところがある。

参考文献

安藤恭子（1996）「「十月の末」―浸食される構造」『宮沢賢治〈力〉の構造』朝文社

安藤恭子（2002）「イーハトーブ〈語り〉学 語る身体、語る言葉―「虔十公園林」を聞く／読む」『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第二四号、宮沢賢治イーハトーブセンター

今村嘉雄（1970）『日本体育史』不昧堂出版

岩手県（1964）『岩手県史 第九巻 近代篇四』杜陵印刷

岩手県教育委員会編（1981）『岩手近代教育史 第一巻 明治編』岩手県教育委員会

牛崎敏哉（2001）「杉苗を植えるということ―「虔十公園林」をめぐって」『宮沢賢治』第十六号、洋々社

大久保英哲（1998）『明治期比較地方体育史研究―明治期における石川・岩手県の体操科導入過程―』不昧堂出版

長志珠絵（1998）『近代日本と国語ナショナリズム』吉川弘文館
小沢俊郎（1992）「虔十とベコ石」続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成 第二〇巻』日本図書センター
押野武志（2000）『宮沢賢治の美学』翰林書房
海後宗臣編（1964）『日本教科書大系 近代編 第五巻 国語（二）』講談社
海後宗臣編（1967）『日本教科書大系 近代編 第二七巻 習字その他』講談社
岸野雄三・竹之下休蔵（1983）『近代日本学校体育史』日本図書センター
木下秀明（1982）『兵式体操からみた軍と教育』杏林書院
木村功（2000）「宮沢賢治「虔十公園林」論―仮構としての〈虔十公園林〉―」『岡山大学国語研究』、第一四号、岡山大学国語研究会
国立教育研究所編（1974）『日本近代教育百年史 六 学校教育（四）』国立教育研究所
酒井直樹、西谷修（1999）『〈世界史〉の解体』以文社
佐藤勝治（1987）「宮沢賢治と四っ角山」『賢治文学のよろこび 第一集』寂光林
段裕行（2000）「「イーハトヴ」の近代―「東北」の記憶と忘却―」『日本文学』四九巻二号、日本文学協会
段裕行（2001）「宮沢賢治と鉄道―植民地化された身体―」『昭和文学研究』第四三集、昭和文学会
続橋達雄（1980）「虔十公園林」佐藤泰正編『別冊国文学 六 宮澤賢治必携』学燈社
続橋達雄（1992）「タネリのさびしさ」続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成 第一九巻』日本図書センター
名須川知子（2004）『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房
信時哲郎（2005）「宮沢賢治「文語詩稿五十篇」評釈 六」『山手日文論攷』第二五号、神戸山手短期大学

茂木俊彦・高橋智・平田勝政（1992）『わが国における「精神薄弱」概念の歴史的研究』多賀出版
文部省（1972）『学制百年史 記述編』ぎょうせい
米村みゆき（2003）『宮沢賢治を創った男たち』青弓社